

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-740	15-124	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b> Midlife Alcohol Consumption and the Risk of Stroke in the Atherosclerosis Risk in Communities Study. 動脈硬化リスクのある地域住民における中年期におけるアルコール消費量と脳卒中との関連研究		
<b>執筆者</b> Merle BM, Silver RE, Rosner B, Seddon JM		
<b>掲載誌</b> Stroke. 2015 Nov;46(11):3124-30. doi: 10.1161/STROKEAHA.115.010601		
キーワード	PMID	
アルコール、飲酒量、脳梗塞、脳出血	26405203	
<b>要 旨</b>  <b>目的：</b> 低～中等量の飲酒が心血管系に良い影響をもたらすとの説を検証するため、中年期における自己申告の飲酒状況と脳卒中（脳梗塞・脳出血）発症との関連を検討する。 <b>方法：</b> 対象者は The ARIC Study(動脈硬化リスクを有する 45-64 歳の白人・黒人からなる米国内 4 地域住民の統合コホート)の 12,433 人。ベースライン(1987-89)の飲酒状況は非飲酒（断酒者除外）と、週間飲酒量 3 水準による計 4 階層とされた。脳卒中発症は米国国内調査基準（National Survey of Stroke criteria）に従って評価、2011 年まで追跡された。コックス比例回帰分析により、飲酒状況と脳卒中発症の関連について性・人種その他を調整して検討された。更に、二次曲線のモデル化により量反応関係が検討された。 <b>結果：</b> 非飲酒者は 30%、少量が 39%、中等量が 24%、多量が 5%だった。追跡期間中（中央値 22.6 年）に脳梗塞は 773 例、脳出血は 81 例だった。非飲酒者に対する脳梗塞発症は少～中量飲酒では増加しなかったが多量飲酒で 31%増加した(調整ハザード比, 1.31; 95% 信頼区間, 0.92–1.86)。脳出血は少量飲酒では増加しなかったが、中～多量飲酒で増加した(同 1.99、1.07–3.70)。多量飲酒は脳梗塞・脳出血の増加につながるとともに、脳出血は中等量飲酒でも増加した。飲酒量と脳卒中発症に統計的に有意な量反応関係は認めなかった。 <b>結論：</b> 本研究における約 20 年の検討の結果、中年期における少～中量の飲酒が脳卒中抑制に効果的であるとはいえなかった。		